

茶庭

2014.4.24-2015.3.26



茶庭制作前
2014.4.24



開拓

2014.5.8—2015.6.19



茶道部部室横の空き地を茶庭にするべく、つちのいえのメンバーで茶庭づくり隊が発足した。この空き地は、自転車やタイヤ、正体不明のゴミが捨てられていた廃墟を、業者に片付けてもらった際に現れたものである。そのため、ビニールや鉄くずなどが多く埋まっており、まずはそれらを処分し、土地を整備する必要があった。腐葉土の中から得体の知れないものが出現するのも毎回である。

また開拓するうちに、東屋や苔山をつくる案も出てきたため、その配置なども考えながら高低差を調節するが、土を掘り起こすだけでなく、石や木の根も取り除かねばならず重労働が続いた。

空き地の奥は雑木林のため、枝葉を落とし、時には根も切り、最終的には飛び石を配置し露地とした。ここには蜂の巣があったり、某部活の荷物が散乱したりと、やはり重労働が続く。

前期はかなりの時間を、この開拓に費やした。

竹の伐採と油抜き

2014.6.9/6.26

2014.10.30/11.17



竹の伐採は本来、水揚げが止まる秋口から冬である。二度目の東屋用は10月末に行ったものの、一度目の竹垣用は作業の都合で6月に行った。この頃に切り出すと虫も付きやすい為、できれば作業計画を竹とり時期と合わせて考えるのが望ましい。どれくらいの長さ、本数が必要かを計算しておき、切り倒したあとは計測しながら切り分けておくと、後々の作業で困らない。

油抜きは耐久性を高め、また光沢を出し見栄えを美しくするために行う。竹を炙ると、竹自身の油が表面に浮き出てくるため、そのつど布で拭う。冷えて油が泡のように残るのを防ぐよう、火傷に注意しつつ、素早く行う。

作業は陶磁器棟で行い、一度目は外に窯をつくり、二度目はガス窯を用いた。

おやつに団子や煎餅、芋を焼いて食べるのもお忘れなく。

竹垣

2014.6.30－2015.3.19



やっと開拓が一段落つき、竹垣の制作へ。

植治・十一代目小川治兵衛さんが7月24日に来られる事が決まり、それまでにお見せできるものを、と少し作業をいそぐ。ひとまず材料の関係で穂垣を作ることになり、6月30日、大塚竹材店さんに伺い竹垣の作り方を教わる。

基本的な構造が理解できたため、そこから応用して、とある神社で見かけた竹垣の編み方でもつくることのできた。

入り口の竹垣の細い竹材は、漆工科の大矢先生からいただいたもの。その他の竹材は6月に伐採した竹を割いて油抜きしたものを用い、釘隠しは、東屋を制作した際の残りを用了。

結局、合間あいまに作ったため、おひろめ茶会まぎわまで竹垣制作は続いた。

苔

2014.6.5—2015.3.20



茶庭にはやはり苔を、との考えから大学中から苔を剥いで移植する。同質の土からの移動のため、ほとんどはうまく根付いた。鳥や猫の攻撃もあるため、根付く前にはがれたものは、その都度戻す。

苔山は枯葉、枯枝で高さをつくり、開拓で生じた土を濾したもので山にし、その上に苔を置いたあと、端々を軽く押さえている。夏場は朝と夕方に水やりをする必要があるが、日が昇ってからだつた雨がお湯になるため、朝は早めの水やりが必要。秋冬は水やりもだが、日光が当たらないと枯れるため、積もった枯葉を退けてやるのが大切である。

楓はつちのいえ周辺にあったものを深めに掘り出して移植。某先生に踏まれたのにもめげず、秋には紅葉もし、春には新芽も吹いた。



飛び石

2014.8.28—2015.3.20



飛び石を配置するにあたり、まずは全体の流れを決め、それからどのような石を、どの位置に使うのかを決めた。石は彫刻棟の廃材と、開拓の際に発掘した自然石を用いている。手水鉢の石臼はもともと、凹みのある面を伏せた状態で置かれており、偶然ひっくり返した時に臼であることが判明し、手水鉢に用いることとなった。

石の固定は穴を掘り、小石を詰めて高さを調節してから、粘土質の土や砂で少しずつ固めていく。

東屋 ①基礎と屋根 2014.11.13-11.21



東屋を建てる際には、床が雨で濡れるのを防げるよう屋根からつくり始めた。

柱材は自立するように切っておく。

構造は小さい模型を作って、組み立てる手順も同時に確認する。

はじめに、壁側の二本の柱を上梁で固定し、手前の柱の高さに合わせて下梁で固定。手前の柱二本も梁で固定する。次に、壁側の下梁と手前の梁をつなぐ梁を固定し、壁側の軒先と手前の軒先をつなぐ梁を斜めに固定して、手前から奥の軒先になる梁を固定する。

屋根は半割りにした竹を交互に編む。この時、縄が当たる箇所に切れ込みを入れ、上面の竹が浮かないようにすると良い。

柱や梁の固定、屋根を編むのにはビスを使わず、シュロ縄で縛って仕上げた。

シュロ縄は同じ値段でも店によって質が異なるため、なるべく太さが均一のものを選ぶこと。

東屋 ②床張り 基礎 2014.8.20—2015.3.6



床の縁には木を使いたい、と話がいたり、つちのいえ周辺でちょうど良さそうな木を探し、切り落とすところから始まった。乾かしている間に切り落とした直後よりも曲がり、床の形に相応しい形となった。東屋の位置を決め、縁の木を石の上に仮置きをしてから、飛び石の位置を決め、全体のバランスを思案しながら作業を進める。縁の木は、壁の若干の出っ張りや柱と石で支えた。

床の構造は警備員の高井さんに手順や束石（床束を支える石）、床束（床を垂直方向に支えているもの）、大引き（床束の上を渡しているもの）、根太（大引きの上を渡しているもの）の数、位置を教わりながら作業を進めた。まず、壁と手前の縁に大引きが互いに水平になるよう固定する。そのあと、この大引きを支える床束と束石を入れて固定。次に壁と縁を繋ぐ奥の大引きと床束と束石を固定、そして入口、真ん中の大引きを同じ手順で固定したあと、根太を載せて固定していく。

束石は彫刻棟の廃材、床束はつちのいえの柱材、大引きと根太は陶磁器棟の新材（京芸生の廃材）を用いた。

東屋 ③床張り 仕上げ 2015.3.6-3.20



いよいよ床の仕上げにとりかかる。根太の上にコンパネを載せてビスで固定し、その上に三和土の土をたたき、乾いてから化粧土を刷毛で塗る方法で床を仕上げた。

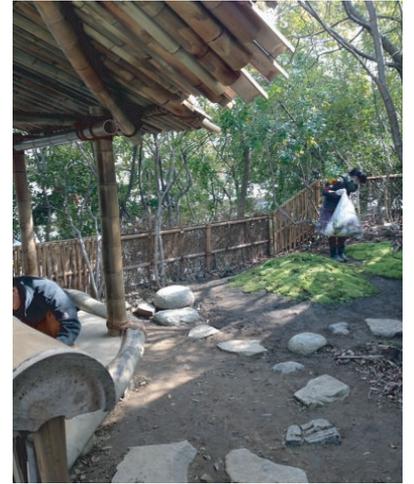
コンパネは京芸生の廃材を用いている。

三和土は砂と壁土を 1:1 でまぜ、水を加えて練ったもの。

化粧土は壁土と水を陶磁器棟の釉薬粉碎機で砕き混ぜ、漉したものを塗ったが、乾いてから細い竹で叩き磨き、最後にビニール袋で磨きあげている。

しかし、コンパネの繋ぎ目が割れやすく、屋根を固定しているシュロ縄を伝っての雨漏りで穴が掘られたりするため、今後、化粧土でのひびや穴埋めなどのメンテナンス、場合によっては他の材質に張り替える必要も出てくるかもしれない。

おひろめ茶会 2014.3.22



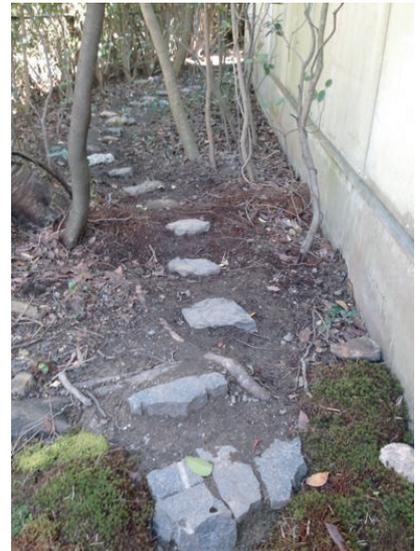
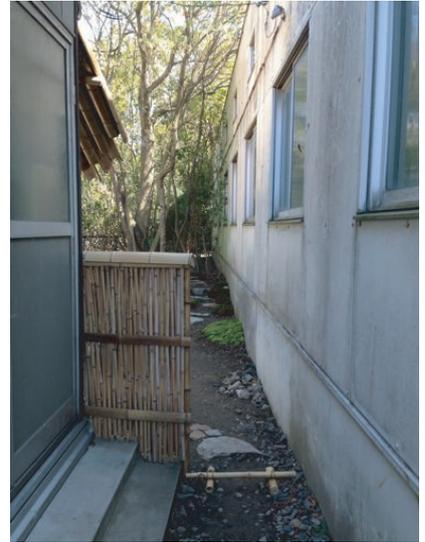
これまでお世話になった学内外の方々をお招きし、3月22日、おひろめ茶会を開催する。主催は左写真、右手前から下村（陶磁器4）、木田（日本画4）、児島（日本画4）、撮影の高橋（日本画4）である。最後の片付けや野花を生けたりと準備をし、14名のお客様が来て下さった。またお菓子の差し入れまでいただくなど、ありがたい限りであった。

座布団は赤いフェルトを丸く切り、お菓子は梅ヶ枝餅（あんこ餅を焼いたもの、太宰府天満宮の名物）の桜あん版を作り、茶碗は陶磁器専攻の下村が当日に窯出ししたものを用いた。

ひとまず、2014年度の作業はこの茶会で締めることが出来たが、苔の拡張や床の修正など、今後もより良い茶庭を目指し作業を続けてもらいたい。

2014 年度成果

2015.3.26



制作

京都市立芸術大学

2014年度 つちのいえ 茶庭づくり隊

制作協力

京都市立芸術大学

つちのいえ

秋山陽

井上明彦

長谷川直人

漆工科 大矢一成

警備員 高井勝治

総務課 山本賢志

茶道部

陶磁器棟

見学・資材提供・技術指導等協力

徳正寺 秋野等 彰子

しっくい浅原 浅原雄三

大塚竹材店

植治 十一代目小川治兵衛

創作建築工房大五 斎藤悟

佐藤家住宅

大山崎歴史資料館 寺嶋千春

花トピア大原野 畑勲

(敬称略、五十音順)

編集・撮影

高橋めぐみ

(竹の伐採、床縁の木材を運ぶ写真はつちのいえホームページから借用)